

2017年12月31日聖学院教会聖日礼拝説教

「栄光、神にあれ」

ローマの信徒への手紙 11 : 25 - 36

菊地 順

パウロは、今日の聖書箇所 11 章の結びで、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」と語っています。それは、一つの話、しかも重要な話の終りに語られた神への賛美です。パウロは、神への大いなる賛美の言葉を持って一つの話を終えたのです。それは、救いを巡っての長い議論でした。パウロは、大きく言えば、7章のところまで、律法による救いではなく、信仰による救いについて語り、8章で霊による新しい命について語ったあと、9章から11章まで、ユダヤ人の救いについて語っています。おそらく、後代のわたしたちから見れば、7章までの信仰による救いの議論がより重要かと思います。しかし、パウロにとっては、それに劣らず重要であったのが、9章から11章までに展開された、同胞であるユダヤ人の救いに関する議論でありました。パウロは、一方では、異邦人への伝道を自分の使命として深く自覚した人でした。しかし、そのことは、同胞のユダヤ人への関心が弱まったということではなかったのです。それどころか、パウロには、絶えず同胞の救いについて深い関心があったのです。

パウロは、9章の初めで、こう語っています。「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」。パウロは、「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります」と語るのです。それは、神の民であるはずの同胞のユダヤ人が、あろうことか、神に背を向け、神から遠く隔たった生活をしてきたからです。パウロは、2章17節以下で、次のように同胞を非難しています。

「あなたは、ユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています。それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。『盗むな』と説きながら、盗むのですか。『姦淫するな』と言いながら、姦淫を行うのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿を荒らすのですか。あなたは律法を誇りと

しながら、律法を破って神を侮っている。『あなたたちのせいで、神の名は異邦人の間で汚されている』と書いてあるとおりです。」

パウロは、そのように、同胞のユダヤ人を厳しく叱責しなければなりません。しかし、それは、そのままが良いということではなく、そうした同胞たちこそ、何とかして救い出したいとの思いからであったのです。だからこそ、「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります」と告白せざるを得なかったのです。そして、その思いは、「わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」と語るほどに、強く、また激しいものであったのです。ですから、9章から11章まで展開された同胞ユダヤ人の救いに関する議論は、いわば、パウロの命を賭けた議論でもあったのです。そして、その命を賭けた議論を終えるに当たって、パウロは心から神を賛美し、すべての栄光を神に帰したのです。なぜなら、「深い悲しみ」であり「絶え間ない痛み」であった同胞の救いという問題が、神の憐みの中で救い出されるという光を仰ぎ見ることができたからなのです。

パウロは11章の1節から24節までのところで、神の民と残りの者について、また異邦人と接ぎ木された枝について語ってきました。それについては、2回に分けて、お話をしました。すなわち、神に背いた神の民イスラエルにも、残りの者を通して新たな救いが起こされ、また異邦人はただ恵みによって神の民に接ぎ木された存在に過ぎないことが語られました。そのことを受けて、パウロは、25節以下の今日の聖書箇所でこう語るのです。「兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになっただのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです」。パウロは、一部のイスラエル人がかたくなになっただのは、異邦人全体が救われ、そして最後には全イスラエルが救われるためであったと語るのです。このことを、パウロは、さらに30節以下で、こう語っています。「あなたがた〔異邦人〕は、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐みを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたの受けた憐みによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐みを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです」。

パウロは、一部のイスラエル人が、律法の支配の下で不従順に陥ったのは、そのことによって不従順に陥っていた異邦人が信仰の従順によって救いに至るためであり、またそのことによって、今度は、不従順に陥っている全イスラエル人が、その同じ恵みによって救われるためであると語るのです。律法から見れ

ば、異邦人は律法を知らず、神への不従順の中にいました。しかし、それは、一部のイスラエル人の不従順を通して、いわば律法よりすぐれた信仰の恵みが発見され、その信仰の恵みへと異邦人が救い出されるためであったのです。そして、今度は、信仰の恵みから見れば、イスラエル人は不従順の中に置かれることになりましたが、それはまた、イスラエル人も律法から信仰の恵みに至るためであったのです。いずれにしても、不従順という契機を通して、異邦人もイスラエル人も、すなわちユダヤ人も、律法から信仰へと救い出されるのだとパウロは語るのです。律法の許では不従順という救いがたい罪の中にいた者が、信仰という恵みの中で従順に生きる者とされると言うのです。そして、そこにおいて、すべての者が救われると言うのです。そして、それこそが、神の「秘められた計画」であったと、パウロは語るのです。「秘められた計画」とは、元々の言葉では「秘儀」という言葉です。口語訳聖書では「奥義」と訳されています。この世界の一番奥深くにある神の働き、それが信仰による救いであると語るのです。それは、神によって実現される世界です。なぜなら、信仰の恵みに招かれるのは、神ご自身であるからです。その招きの中で、わたしたちは初めて神を信じる者とされていくのです。ですから、神を信じるという信仰自体が、神の限りない恵みなのです。そして、その恵みに、すべての者を与らせるために、神はその独り子をわたしたちにお与えになったのです。そして、この世界のすべてのことは、このことをめぐって展開されているのです。

パウロは、この確信に立ったとき、心から神を賛美しないではおられませんでした。33節以下で、パウロは、こう神を賛美しています。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽せよう」。確かに、そうではないでしょうか。神がその独り子をこの世にお与えになり、しかも十字架の死とよみがえりを通して、人々をご自身の民とされようとは、誰が思い至ることができたでしょうか。正に、だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を知り尽くせるでしょうか。この秘儀に直面して、わたしたちも、ただただ神を賛美する以外のことはできないのではないのでしょうか。そして、その賛美は、パウロの最後の言葉へと集約して行くのではないのでしょうか。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。パウロは、信仰の恵みに与り、そこに万人の救いを見たのです。そして、そこにこそ、神の大いなる秘儀があることを知ったのです。そして、声高らかに、神を賛美せずにはおられなかったのです。

ところで、今年2017年は、繰り返し語られてきましたように、宗教改革500周年を覚える記念すべき節目の年でした。しかし、そう語ることができるのも、今日が最後となりました。そこで、この最後の機会を生かして、改めて宗教改

革 500 周年を覚えて、改革者のルターに立ち返ってみたいと思います。果たして、ルターは、神を賛美することについてどう語っているのでしょうか。実は、このことに関しても、ルターの考えは、やはり「信仰義認」の考えなのです。前回の説教でも触れましたが、ルターは、この一点に集中し、この一点において突破した人です。そして、歴史を大きく変える改革を引き起こした人です。そうしたルターにとっては、信仰こそが、何よりも、神に栄光を帰することでもあったのです。ルターには宗教改革の三大文書と呼ばれるものがありますが、その中の一つ『キリスト者の自由』という書物の中で、信じることの意義を次のように語っています。「他人を信じる場合、その人を義しい、真実な人と思うからこそ信じるのであって、これは、一人の人間が他の人間になしうる最大の栄誉である。逆に、他人をだらしのない、嘘つきの、軽薄な人と思うならば、これは最大の侮辱である。このように、魂も神のことばを堅く信じるならば、魂は神を真実で、義で、正しい方であると考え、そうすることによって、自分がなしうる最大の栄誉を神に帰しているのである。----それは、神がそのすべてのみことばにおいて義しく、真実であられることを、魂が疑っていないからである。逆に、神を信じないこと以上に大きな不名誉を神に示すことはできない」(若干の修正を加える)(キリスト教古典叢書『ルター著作選集』教文館、276頁)。

すなわち、ルターは、神を信じること自体が、神に全幅の信頼を置いていることで、そのことこそが、神に最大の栄誉を帰することになると語るのです。従って、信仰こそが、神への最大の賛美でもあるのです。それに対し、行いは、そうした賛美とはならないのです。ルターは、行いについて、こう語っています。「行いは死んだものである。たとえ神を誉め、賛美するために行いがなされ、また、なされうるとしても、行いは神を崇えたり、賛美したりすることはできない。[なぜならば、神が求めておられるのは、行いではなく]行いの主体を求めている[からである]。これは、信仰以外にはない」(若干の修正を加える)(278頁)。

ルターは、神が求めておられるのは、行いの主体そのものであると言うのです。わたしたちが完全に神に向かうことこそが大切なのです。そして、それは、神に全幅の信頼を寄せて神を信じるということで、それ以上に神に対してふさわしいあり方はないのです。すなわち、信仰こそ第一義的に大事なのです。そして、行いはただそれに付随して生じてくるものに過ぎないのです。ですから、ルターにとって、その逆である不信仰ということは、最も罪深いこととなります。ルターにとって、不信仰こそ最大の罪なのです。なぜなら、それは、神に栄誉ではなく、不名誉を帰すことになるからです。神を信じないということほど、神を侮辱し、ないがしろにすることはないからです。それに対し、神に全幅の信頼を寄せる信仰は、神への最大の賛美となるのです。

ところで、こうした神への賛美は、人間が取るべき最もふさわしい神への態

度であるというだけではなく、わたしたちの日々の生活においても、非常に重要な意味を持っているのではないのでしょうか。わたしたちは、日々、多かれ少なかれ、さまざまな思い悩みの中を生きています。人間関係のこと、仕事のこと、将来のことなど、悩みは尽きません。しかし、そうした悩みをさらに重苦しいものとしているのが、人間の心に潜む「他人を妬む思い」ではないのでしょうか。この妬みという問題は、自意識と共に存在するもので、人間の意識に深く根ざしています。そして、それはしばしば人を狂わしめ、時には悲惨な結果を生じさせます。聖書にも、この妬みの話が満ちています。それは、弟のアベルを妬んだカインの話から、主イエスを妬んで十字架につけたユダヤ教の指導者たちまで、数多く記されています。しかし、また同時に、妬みに捕らわれなかった人たちも多く記されています。その人たちは、信仰によって生きた人たちです。信仰によって神を見上げ、神を賛美して生きた人たちです。今年の祈禱会では創世記を学んできましたが、そこで描かれている信仰を持って行きた人たちには、妬みが見られません。それが、信仰の証しであるとも言えるかもしれません。このことについて、哲学者のキルケゴールは、こういうことを語っています。それは、「妬みは不幸な自己主張であり、賛美は幸福な自己喪失である」と。妬みは不幸な自己主張である、それに対し、賛美は幸福な自己喪失であると言うのです。確かに、そうではないのでしょうか。賛美こそ、妬みを乗り越える唯一の道であるとも言えるのではないのでしょうか。賛美の中には、人間を健全化する力があるのです。いいものはいい、素晴らしいものは素晴らしいと心から言えるとき、わたしたちは妬みから解放されるだけでなく、自らも健全化されていくのです。それとは逆に、妬みに捕らわれると、心が歪み、気持ちも塞がり、不健全な者となっていくのです。そうであるならば、賛美こそ、わたしたちを解放するものなのです。そして、賛美の最大のものは、神への賛美なのです。この神への賛美において、わたしたちは心の底から解放され、健全な者とされていくのです。

わたしたちは、こうした信仰の恵みに与っている者なのです。そして、信仰によって神と一つにされているだけではなく、その信仰という一点において、すべてを与えられている者でもあるのです。そのことを思い起こすとき、わたしたちもまたパウロと共に、心から神を賛美せざるを得ないのではないのでしょうか。そして、その賛美こそが、わたしたち人間にとって、最もふさわしい神への応答でもあるのです。そしてまた、それは人間のみならず、生きとし生けるものすべてにとっても、そうであると言えるのではないのでしょうか。

以前にもお話ししましたが、13世紀に活躍したアッシジのフランチェスコは、鳥やオオカミにも説教したことで有名です。そのとき、フランチェスコは何と説教したかと言いますと、神を賛美せよと説教したと言われていています。鳥は鳥

として、オオカミはオオカミとして、その存在と働きを通して、神を賛美せよと説教したのです。しかし、それはすべての被造物に言えることではないでしょうか。そして、なかんずく、わたしたち人間にとって、神を賛美することは、人間のなしえる最高の神への応答なのです。そしてまた、人生に終わりにおいて、心から神を賛美することができるならば、わたしたちの人生もまた祝されたものであったと言えるのではないのでしょうか。

明日から、新年を迎えます。主の年 2018 年は、平成 30 年という節目の年でもあります。聖学院大学も、来年は創立 30 周年を迎えます。また JR が誕生して 30 年ともなります。いろいろな節目の年になりそうですが、もう一つ、私にとって記念すべきことは、アメリカの公民権運動の指導者であったマーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺されてから、ちょうど 50 年目の節目を迎えることです。1968 年 4 月 4 日、キングは、清掃労働者のストに参加するために訪れたアラバマ州のメンフィスで暗殺されました。そして、その前日の夜行った講演は、キングが深く自分の死を予感する中で語られたもので、大変有名になりましたが、その講演の中でキングは、自分自身の歩みを振り返ったあと、イスラエルの民をエジプトから導き出したモーセの最後を思い起こしながら、次のように語ったのです。「たしかに私も人並みに長生きをしたい。長生きにはそれなりの意味がある。でも今の私には重要なことではない。今はただただ神の意志を体現したいだけの気持ちで一杯だ。神は私を山の頂まで登らせてくれた。頂から約束の地が見えた。私自身は皆さんと一緒に約束の地に行けないかもしれない。でも知ってほしい。私たちは一つの民として約束の地に行くのだということを。だから今はうれしい。私はどんなことにも心が騒がない。どんな人も怖くない。主が栄光の姿で私の前に現れるのをこの目で見ているのだから」。

キングは、深く自分の死を予感する中で、モーセが約束の地に入ることを神から禁じられて、山の頂からイスラエルの民を見送ったように、自分も約束の地にはいることはできないかもしれないと語るのです。しかし、それでも自分はうれしいと語るのです。また、もはや、どんなことにも心が騒がず、まただれをも恐れないと語るのです。なぜなら、キングはその目で神の栄光を見たからなのです。キングは、奇しくも、人生の最後に行った講演において、その講演を、神をほめたたえる言葉で締めくくったのです。それは、18 歳で牧師になり、26 歳でモンゴメリーのバス・ボイコット闘争の指導者となり、汝の敵を愛せよとの主の教えを、非暴力の精神で貫いたキングの人生を締め括るのに、最もふさわしい言葉であったと言えるのではないのでしょうか。

主の年 2017 年も、あと半日で終わります。今日は、正に 2017 年の最後の日です。この一日を終えるとき、そしてまた、この 1 年を終える今、わたしたちもまた心から神を賛美しつつ、この最後の時を過ごしたいと思います。そし

てまた、わたしたちの人生を終える時も、正にそうありたいと思います。そして、すべての最後において、「栄光、神にあれ」と心から神を賛美し、神に栄光を帰するわたしたち一人ひとりでありたいと思います。このあと、クリスマスの讃美歌 106 番を歌いますが、心から、「グロリア・イン・エクセルシス・デオ」  
「いと高きところには栄光、神にあれ」と賛美したいと思います。